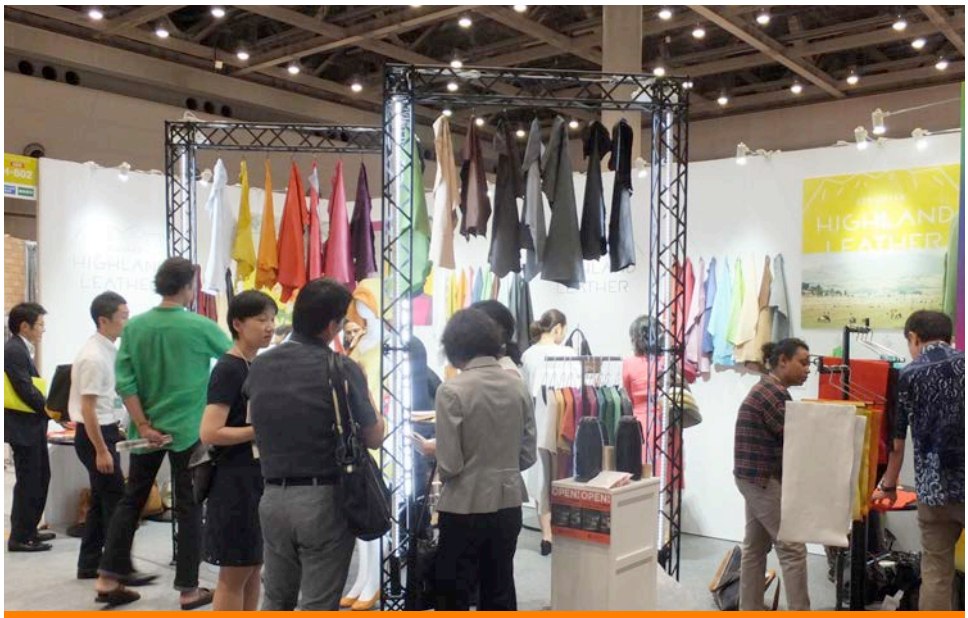

JANES Newsletter No.25-3
日本ナイル・エチオピア学会

2018 年 3 月 16 日

目次

1 第 23 回高島賞受賞報告 14 頁

2 新刊ライブラリー 18 頁

3 ナイル・エチオピア地域現地・渡航情報 19 頁

4 エチオピアからの留学生紹介 20 頁

5 コラム: JICA プロジェクト活動紹介 21 頁

1. 第 23 回高島賞受賞報告

受賞対象論文
野口真理子「エチオピア西南部アリ農村における高齢者の生活を支える社会関係」(『アフリカ研究』90 号 71-83 頁、2016 年)

講評

近年、高齢者研究は、欧米や日本などの超高齢社会の社会問題に限定されず、多様な分野と地域のテーマとなっており、比較老年社会学や国際医療分野では発展途上国を視野に入れた地球規模の高齢化(グローバル・エイジング)の問題が提起されている。しかし、どちらかといえばアフリカ地域に関しては数値による量的な把握が主であり、個別社会における高齢者研究が十分に進んでいるとはいいがたい。

一方で、アフリカの個別社会を対象とした民族誌的研究において、老人の存在は調査者にとって現地の歴史や慣習に通じた重要なインフォーマントとして、あるいは政治的宗教的な権威をもつ長老として描かれてきたが、高齢者というカテゴリーによって主題化することはあまりなかった。先に述べた途上国における高齢者研究の進展とともに、アフリカ地域の地域社会の高齢者のケアや生活実態を注目するようになったのは、ごく近年のことである。

こうした学術状況において、野口氏の論文はアフリカの個別社会の高齢者の生活実態を扱った稀有な研究である。野口氏は、エチオピア南西部のアリ人が主として居住する農村地域において 2008 年 8 月から 2014 年 9 月までの合計 20 か月間、断続的に現地調査を行い、高齢者がどのように主体的な生活実践を行っているのかを明らかにしている。これほどまでに高齢者に寄り添った研究は他に見られず、濃密な参与観察に裏付けされた研究成果として高く評価できる。個々の評価点は、具体的には次の通りである。

第一に、アフリカの高齢者研究では、どちらかといえば HIV/AIDS、移民・出稼ぎ、都市住民といった特定のテーマに集中する傾向にあり、アフリカ地域の大部分を占める農村社会を対象とする研究は必ずしも多いとはいえない。野口氏の論文はアフリカ農村に生きる高齢者の重要な民族誌的な事例を提示している。

第二に、5 年間合計 20 か月にもわたる長期の参与観察にもとづき、個別の高齢者に焦点を当て配偶者の死亡や居住地の移動などの変化を記述している。短期の調査では十分に把握できない生活の変化と高齢者の主体的な対応を明らかにしている。第三に、具体的ないくつかの事例を比較検討することによって、量的なデータの提示や一枚岩的な老人表象の記述に陥ることなく、社会内部の高齢者の多様性を示すことができている。第四に、高齢者の生活を、生業形態、社会規範と感情、社会関係、居住関係のなかで日常的な相互行為とともに詳細にかつバランスよく記述することに成功している。ときに矛盾するような複数の社会規範がどのように人生に影響するのか、また、社会規範が高齢者自身と周囲の人びとにどのような行動を促すのか、あるいは感情を生じさせるのか、そして、その社会規範のなかで高齢者自身が主体的に生計維持をどのように可能にしているのかを含めて、特に社会関係と居住関係の重要性が示されている。それは、しばしば福祉制度を前提とする社会における高齢者研究の枠では捉えることのできない、高齢者の主体的な生活実践の実証的な提示である。第五に、アフリカ農村社会で示されがちなエスニック集団の社会規範という説明に単純に還元できない、エスニックな境界をこえる高齢者のケアの事例も提示している。

こうした研究成果は粘り強い長期の現地調査の賜物であり、それは野口氏の高い研究能力の証である。これまでケアされる対象として描かれる傾向にあった高齢者を、多様な社会状況において主体的に社会関係を取り結ぶ存在として捉え直すことに見事に成功している。今後、アフリカ地域において展開される高齢者研究だけでなく、福祉保健政策においても重要な事例とアイデアを提示することになろう。

ただし、特定の世帯に絞ることによって具体的かつ詳細な高齢者の実態を記述する一方で、広範な実証的なデータの提示や理論的な展開が十分であるとはいえないが、これは学術誌の紙数という物理的な制限によるものでもあろう。今後のさらなるデータの提示と理論構築が期待されるが、対象論文によって野口氏が示した高い研究遂行能力から十分に可能である。

以上のことから、野口氏の研究成果は、ナイル・エチオピア地域研究および社会学・文化人類学において重要な学術的貢献を果たしている。選考委員会は全員一致して第 23 回高島賞（2017 年度）の受賞に値すると判断する。

2017 年 3 月 5 日

審査委員長　田川　玄
審査委員　　西崎伸子
審査委員　　佐藤美穂

第 23 回高島賞受賞によせて

野口真理子（京都大学）

写真 1　重田学会会長から賞をうけとる筆者

この度は、日本ナイル・エチオピア学会第 23 回高島賞を授与していただきましたこと、大変驚いているとともに、とても嬉しく思います。まずは、審査をしてくださいました方々をはじめ、今日までたくさんのご指導をいただきました先生方、諸先輩方、研究仲間のみなさま、そしてエチオピアで私を受け入れて下さった現地の人びとに深く感謝を申し上げます。

今回受賞の対象としていただいた論文は、エチオピア南西部のアリの農村において、ガルタと呼ばれる老人たちの生活がどのように成り立っているのかを論じたものです。とくに老人たちの生業活動への関わり方と、かれらが誰と同居するか、誰の近くに住むか、子はどこに住んでいるかという居住関係の編成というふたつの側面に注目して、かれらの暮らしを支えている社会関係について論じました。

私は 2008 年から、エチオピア南西部のアリの農村において、老人たちの暮らしを見てきました。アリの村では、農耕を基本とした自給度の高い生活が営まれていましたが、私の最初の疑問は、こうした農村に暮らす老人が、年齢を重ねて農耕に従事しなくなるとすれば、そのときどのように生活の糧を得るのかという、かれらの暮らしの最も基本的な部分でした。

「なぜ働くのか。もちろん、食べるためである」

「働くこと」と「腹を満たす」ことへの関心は、しばしば象徴的に語られます。実際に調査をはじめると、あまり「暇な老人」に出会うことはありませんでした。ガルタを訪問する約束をしていてもなかなか出会うことができませんでした。実際に会えば、かれらは確かに白髪だったり、顔にシワがあったりするものの、私は彼らに「想像よりも若い」という印象を受けました。実際に人びとがもつガルタのイメージは、当初私が想定していたような「農作業や家事に関与しなくなった老人」というイメージではないことが多く、世代再生産を達成し、生業活動への関与の度合いが若い世代に比べて低いものの、何らかのかたちで生業活動に関与し続けている、そういうイメージが優先していました。

ガルタはとにかく活動的でした。ほとんどのガルタの人びとは、牛耕などの負担の大きな作業はせず、また日によっては体調が悪い日もありますが、動ける日はほとんどの時間を家の外で過ごし、世帯外からの労働力を得ながらも、まさに農作業に従事していました。世帯間での共同的農耕はガルタ世帯に限らず広くおこなわれており、世帯外の労働力の投入は他のより若い人びとにとってもごく普通のことであるということ、そしてさらにはガルタが若者に食糧を援助するケースなど、人びとに頼られるガルタの存在も明らかになりました。年代に限らず互いに足りないものを補完しあうようなことがごく当たり前におこなわれており、こうした日常に埋め込まれたケアの実践を記述したいと思うようになりました。

しかしながら、視力を失い、家からほとんど出ることがない男性、子どもや兄弟、同世代の友人たちに先立たれ、生業活動もほぼ完全にやめてしまった夫婦、定期市へは軽いハーブ類しか運べず、親戚も、土地も多くない寡婦女性など、上述のような形での生業活動の維持が難しいと思われるガルタがいることもまた事実でした。子どもはもちろん、親戚もほとんどいないようなガルタは、果たしてどのような暮らしをしているのかということを明らかにするために、かれらの居住関係、誰と住むか、誰の近くに住むか、という点に注目し、検討を試みました。

「老親は子どもが見るべき」という規範について、アリの人びとはよく語ります。ただし居住選択において、老親ケア規範におけるケアの担い手である子どもとは、同居ではなく近居という形を選択します。さらにはこうした規範の範疇外にいる者であっても、老人を「みる」役割の一端を担うことがあるという点を今回の論文で報告しました。

このことが、老親であるガルタが子に依存しすぎることなく、自律的な生活を維持することにつながっているように思われます。子どもや親戚を中心としながら、それ以外の人びとをも巻き込んでいける、そして結果的に依存先の集中を防ぐようなかたちで、生活に必要な支援を獲得することが実際にできており、これが日常的な、顔を合わせる行為の蓄積に支えられているという点を本論文で指摘しました。

今回のこの論文では、エチオピアのひとつの農村での、高齢者の生業活動を具体的に記述しながらかれらの生活を成り立たせる社会関係を論じましたが、最も重要な課題として、本論文が事例分析に終始してしまったことが挙げられます。アフリカの老い、高齢化、そして高齢者ケアをめぐる議論に貢献していくためには、より広い文脈で老人の地位や役割、処遇にかんするこれまでの議論からの考察や、都市化や人口移動、近代学校教育の浸透などによる現代的影響もまた分析対象とする必要を感じています。今後の展開として、まずはエチオピア国内でのより大きな文脈での高齢者ケアにかんする動きと関連付けて論じていくことが必要であると考えています。また、本論文で重要であると論じた「顔をあわせる」行為とその蓄積によって維持されている関係性が、より都市的状況におかれた場合にどのように立ち現れるか、かれらがさまざまな状況の変化にどのように対応していくのかといった点について、検討していきたいと考えています。

個々人の「老い」の経験は、個々人の「人生」そのものであると同時に、特にア

写真 2　受賞講演をおこなう筆者

リにおいては、「老い」というのは単なる喪失の過程ではなく、それ以上に、人生において人びとが達成すべき目標のような捉え方がされているように感じています。日本語においても、古くは「老い」ということばには、「追う」、すなわちなんらかの価値が追加されていく過程と捉えられていたという話もあります。私の最も身近な老人である祖母、そして両親の今後のこともまた常に頭に置き、エチオピアでの、そして日本での、どこか共通するような、しないような「老いにたいする構え」について、そして、幸せに老いることについて、考えていきたいと思います。

みなさまにはこれまで多くの面で支えていただき、また時には叱咤激励をいただきましたことで、こうして現在も研究を続けることができておりますこと、心より感謝いたします。

長生きすれば必ず人は老いる。その一方で、老いはそれぞれの文化、社会によって多様に意味づけられているという、そうした人類の普遍性と文化の多様性にまたがる「老い」をテーマに、今後も研究を深めていきたいと思います。みなさまには、引き続きご指導・ご鞭撻を賜れますと幸いです。研究に対する決意を新たにするきっかけをいただけましたこと、重ねてお礼申し上げます。

写真　エンセーテの加工作業を共におこなう老夫婦

写真　聞き取りをおこなう筆者

2. 新刊ライブラリー

新刊紹介『現代エチオピアの女たち：社会変化とジェンダーをめぐる民族誌』（石原美奈子編著、2017 年、明石書店）

本書は、エチオピアの女性とジェンダーに焦点をあて、民族誌的探求を目指したものである。実際に、執筆者はフィールド調査を基づく研究を実施している。また、本書はエチオピアの女性やジェンダーについての多岐にわたる研究成果をまとめたものであり、エチオピアのジェンダー研究の現状を知る和文の入門書としても位置付けることができる。

本書の構成は、全 4 部計 8 章から成る。第 1 部では、「変貌する家族」として、土地制度の変遷とその影響による女性と土地に関わる状況を示した「第 1 章：土地を獲得する女性たち」、海外出稼ぎへ出た女性の経験とその家族の複雑な模様を表した「第 2 章：越境する女性たち」で構成される。第 2 部は、「グローバル言説と向き合う」として、「第 3 章：家族計画をめぐるジレンマ」、「第 4 章：女性性器切除と廃絶運動」にて、家族計画及び女性性器切除廃絶という二つのグローバル言説に対するエチオピアの状況を議論している。第 3 部では、「体制に挑む」として、「第 5 章：戦う女性たち」では、デルグ政権下でのティグライの女性兵士の状況が明らかにされ、「第 6 章：キリスト教国家とムスリム聖女」では、キリスト教からイスラムに改宗した女性の考察が行われている。第 4 部「聖性に集う」の「第 7 章：ハドラに集う女性たち」では、霊媒師や聖者に集う女性の状況が明らかにされ、「第 8 章：『生活の向上』を目指す」では、ムスリム聖者に身を寄せる女性の状況を示している。

筆者が教育に関心があることもあるが、エチオピアにおいての学校教育普及や高等教育機関拡大等による女性への影響に対する論稿があっても面白かったかもしれない。

本書の大変興味深い点は、男性優位の傾向があるエチオピア社会において、弱者としての女性という視点だけに注目するのではなく、女性の柔軟性などの強さにも焦点をあてている点である。例えば、女性兵士やムスリム聖女の章では、歴史的に活動的であり、強い意志を持ったエチオピアの女性の姿をみることができる。また、エチオピアの農村部の女性が、現代のグローバル化の影響を受けながらも、国家や社会が構築する秩序や伝統といった制約の中で、生活を営む葛藤などが、家族計画や出稼ぎ労働等様々な観点から述べられている点も注目すべきであろう。

フィールド調査や奇跡譚を元にしているため、全体としてインタビュー抜粋が多く、調査対象者のエチオピア人女性やその周辺の人々の考えや認識を、臨場感を持って理解できる点も本書の特徴としてあげておきたい。女性やジェンダーという観点から、エチオピアの状況を再認識することのできる書籍である。

利根川 佳子
（早稲田大学/学会員）

新刊紹介『難民問題と人権理念の危機――国民国家体制の矛盾』（駒井洋監修、人見泰弘編著、2017 年、明石書店）

本書は、2011 年から刊行されている「移民・ディアスポラ研究」シリーズの第 6 巻である。12 の章と 6 つのコラムを含む三部で構成され、巻末には移民・ディアスポラに関する新刊和書の書評を掲載する。総勢 18 名による共著であり、編者あとがきにもある通り「ディシプリン、方法、フィールドも異なる多様な論考が収録」（p.302）されている。ここでは紙幅の都合上、サハラ以南アフリカの章のみを紹介する。

第 3 章を担当する栗本氏は、1978 年からアフリカ北東部、とくに南部スーダンで人類学的な調査を行なってきた。 本章は、難民支援にかかわるさまざまなアクター間の関連を議論しながら、現在の南スーダンから多くの難民が流出した要因である内戦の背景と展開を詳細に記し、避難生活が常態化するなかで人びとがいかに生活を成り立たせてきたかを解説する。

岡崎氏による第 5 章には重要な指摘が 2 つある。ひとつは、30 年以上にわたって同氏が交流を続けてきた青ナイル地域のガムクの人びとが、避難後に必ずしも悲壮感に打ちひしがれているわけではない点である。もうひとつは難民研究をとりまく諸言説の構造的な問題である。本章には、人道支援機関の報告書に登場する表現には回収されない人びとの生が描かれている。

エチオピアで調査をしてきた宮脇氏による第 9 章では、ディアスポラの問題が扱われる。ディアスポラは途上国に経済的利益をもたらす存在とみなされることが多いが、現在、国境を越えた政治活動においてプレゼンスを高めつつある。本章では 2005 年のエチオピア国政選挙を事例として、北米在住のディアスポラがもつ影響力は、ときには過激になるその政治思想と活動によってエチオピア内政に混乱をもたらすことが論じられている。

第 11 章で須永氏は、1995 年にロンドンで開催されたソマリランド平和委員会の出席者に対する聞き取りをとおして、高等教育を受けた少数の知識人によって組織された委員会の報告書は、必ずしも当該紛争地域の一般市民の声を代弁していたわけではなかった可能性を示した。

地域を越えて共通する諸課題を敷衍しつつ、各地域に特有の歴史的背景や近況の詳細を報告していることは本書の大きな特色のひとつだろう 。難民問題の解決と人権理念の実現をめざす国際社会が介入する前から現地をみてきた著者による論考と、支援現場での実務経験もある著者による実践的な視点が随所にちりばめられた本書は、バランスのとれた導入書である。

山崎　暢子（京都大学/学会員）

3. ナイル・エチオピア地域 現地・渡航情報

I. エチオピア現地情報

II. 国際エチオピア学会情報

III. エチオピア携帯電話状況

I. エチオピア現地情報

2018年2月15日、ハイレマリアム首相は、辞任を発表しました。1月末には大規模な政治犯の釈放がおこなわれましたが、その後も各地でデモは続き、2月13、14日には、オロミヤ州で政治犯釈放の約束を政府にもとめるために大規模なストライキが実施されました。首相辞任発表はその翌日のことでした。ハイレマリアム氏は、議会と与党エチオピア人民革命民主戦線（EPRDF）が辞任を承認するまで暫定首相にとどまります。

BBC（2月15日）
http://www.bbc.com/news/world-africa-43073285

The New York Times（2月15日）
https://www.nytimes.com/2018/02/15/world/africa/ethiopia-hailemariam-desalegn.html

2 月 16 日には、国家非常事態宣言がだされました。この宣言は、今後 6 ヶ月間有効です。在エチオピア日本大使館から、非常事態宣言により設置されたコマンドポストがとりうる措置の主な内容が紹介されましたので、以下に転写します。なお、下記内容とともに、2016 年に非常事態宣言が発出された際には、裁判所の令状なしの逮捕及び家宅捜索、並びに車両及び身体の無作為な検査が実施されたため、外出に際しては身分証の携帯を忘れることのないよう注意することも付記されています。

（1）国民の間で紛争，暴力，衝突を引き起こすような公共の場や秘密裏の扇動，出版物の準備・印刷・拡散，ステージパフォーマンス，身振り，メッセージの拡散を禁止する。
（2）あらゆる通信を遮断・妨害することができる。
（3）市民の安全と治安を確保するため，街頭デモの実施，組織の形成及び集団での移動を禁止する（詳細は後日追って発表される）。
（4）憲法及び法秩序の毀損を目的とした犯罪に関する被疑者を令状無しで拘束する。
（5）犯罪に使用された，または使用されうる物品を接収するために，あらゆる家屋，敷地，車両を捜索する。
（6）あらゆる個人に対する職務質問及び所持品検査を行うことができる。
（7）外出禁止令を発出すべき状況を決定する。
（8）一定期間，道路やサービス提供機関を閉鎖することができる。また，特定の場所への立ち入りや退出の禁止措置を取ることができる。
（9）組織やインフラの警戒状況を決定する。
（10）火気，可燃物，鋭器の携帯を禁止する場所を特定する。
（11）地府政府及び地方住民と連携しつつ，暴動によって破壊された行政構造を復旧する。
（12）行政サービスの提供及び政府機関に対して必要な保護を提供する。なお，サービスを混乱させて本項に違反した者は責任を負う。
（13）基本的な必需品やサービスの供給・配布の安全を確保する。
（14）輸送サービスの流通の安全を統制する。
（15）教育機関における平和や教育・学習プロセスを乱そうとする試みを阻止すべく取り組む
（16）その他，憲法及び立憲体制の保全のために必要な措置をとる。

現在（3 月 10 日）にいたるまで、アディスから地方への陸路移動は不確定な要素も多いためすすめられませんが、空路の移動（南部諸民族州、北部地域）は可能です。ただし、事前の情報収集を十分におこなうことを強くすすめます。

追記：西真如会員が、アフリカレポート（No.55）に「エチオピアの統合危機のゆくえ：民族自治と治療のシチズンシップに着目して」という論考を寄稿されています。現在の状況とこれまでの経緯を理解するうえで貴重な論考です。以下のウェブサイトで閲覧できます。
http://www.ide.go.jp/Japanese/Publish/Periodicals/Africa/2017_30.html

II. 国際エチオピア学会情報

2018 年 10 月 1 日～5 日にかけてメケレ大学にて第 20 回国際エチオピア学会が開催されます。2018 年 2 月 15 日以降、学会事務局から各パネルへの発表申込者に対して、査読通知が送られています。申し込みをした方は、ご確認ください。国際学会ウェブ上では、学会の参加登録手続きは、1 月 1 日から開始予定と記載されていますが、2 月 27 日時点では、まだウェブ上では手続きができない状況です。Foreign nation(Non-Ethiopian)の登録料は 100USD です。

第 20 回国際エチオピア学会
http://www.ices20-mu.org/abstract.html

III. エチオピア携帯電話状況

2017 年 12 月から、新しく携帯電話機を購入してエチオピアの SIM カード（これまで使っていた SIM も含む）を使用する場合は、機種登録が必要です。Telecom もしくは、空港の建物をでたところに登録窓口がありますので、新しい携帯電話機にエチオピアの SIM カードをいれて使う予定の方は、機種登録を忘れずに。

＊ 新しく購入した携帯電話機に、これまでつかっていた SIM を入れて、プリペイドカード（以下、カード）をチャージしても、電話をかける・うけとることができません（空港の建物を出たところにある窓口、もしくは telecom で機種登録が必要です）。

＊ これまで使用していた携帯電話機であれば、チャージして使用可能です。機種登録の必要はありません（2018 年 2 月現在）。

（I～III：金子守恵、京都大学/学会員）

4. エチオピアからの留学生紹介

Haregewoin Mekonnen さん

（京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科・一貫制博士課程１年）

Photo1 Golden Temple

I completed my BA in Social Anthropology at Addis Ababa University in 2015. I worked as a graduate assistant in the department of Social Anthropology of Addis Ababa University. I came to Japan for the first time in July 2015 to attend the summer school at Graduate School of Asian and African Area Studies, Kyoto University. It was a great opportunity for me to know more about the graduate school and their expertise. I was very much impressed by the philosophy and unique values of the school. It was a good networking opportunity for me to establish and maintain relationships with scholars from this graduate school and other fellow students from 8 different countries. I left Japan shortly with a great impression, wish and determination to come back and study here particularly in the graduate school program.

Then upon return to my country, I applied for scholarship, the ministry of education, culture, sports, science and technology (Monbukagakusho: MEXT), to come back and study at this reputable and one of the top universities in Japan. To my surprise, my dream came true within short time. I am grateful to those who supported me in the entire process. I was the only one who got this specific MEXT scholarship from my country at that time out of the seven students worldwide. I would like to seize this opportunity to thank my main supervisor Prof. Masayoshi Shigeta and his colleagues for their tireless effort to make this happen. Their strong commitment and all rounded support made the impossible possible in a surprisingly short time.

I am in the place I was dreaming once and after staying here for over a year I am convinced that this is the right place for me to conduct my research. Currently, I belong to two graduate programs in Kyoto University. Mainly, I belong to the Graduate School of Asian and African Area Studies (ASAFAS) at Kyoto University. Under the big umbrella of ASAFAS, there are three divisions namely Global Area Studies, Southeastern Asian Area Studies and African Area Studies. Since I am doing research in Africa, I am under Division of African Area Studies. The second one is Inter-Graduate School Program for Sustainable Development and Survivable Societies (GSS). This program is formed by integrating 9 graduate schools and three research institutes at Kyoto University to address the global challenges by fostering interdisciplinary approach for global sustainability studies. It is a five-year doctoral program like ASAFAS which is contributing in mentoring and educating the future global leaders. It is a great privilege to be part of the above mentioned two leading graduate programs at Kyoto University.

Let me briefly introduce my plan and the focus of my research. I am conducting research on municipal solid waste management in Addis Ababa the capital city of Ethiopia. The issue of solid waste management can be seen as a global challenge in particular becoming a headache for developing countries like Ethiopia. In our daily activities, we produce the huge amount of solid waste which mostly ends up in the open dumping sites. We face big challenge and spend much time in solving it because it is caused by very complex factors and the impact is also significant. As a social anthropologist, I want to focus on the social and cultural aspects related to solid waste handling practices at household level. Moreover, I intend to explore the meaning of waste in the community and how it could be related to their daily actions as far as waste handling is concerned. I conducted my first preliminary field work in August and September 2017. I would say, it was a successful field work which shapes the research scope with a firsthand experience. Needless to say, talking about waste management hierarchies, minimization and reuse of waste are the preferred ways. In this regard, to contribute something meaningful as well as sustainable, I think, it will be relevant to understand the kind of practices exist in that specific socio-cultural context and to use those findings to support the practices.

I am motivated to contribute something meaningful in the area of waste management using interdisciplinary approach embracing my expertise. The problem needs to be examined from possible multiple angles to ensure feasibility and sustainability of the solution to address this global challenge. Nevertheless, attributable to the complexity of the problem you can never do enough in this regard. If waste is not managed properly it could have impact on air, soil and water bodies which are essential for our survival. It needs relentless effort to address the problem as the result of climate change, its borderless impact and other related global challenges.

Photo2 Data collection in Addis Ababa, Ethiopia 2017

5. コラム

JICA による輸出振興支援の取り組み「チャンピオン商品アプローチ」

写真右上　二度の展示会参加で延べ 350 近い企業がエチオピア・ハイランド・レザーのブースを訪れた

永井教之（JICA エチオピア産業振興プロジェクト（輸出振興）総括
／（一般財団法人）国際開発機構（FASID）主任研究員）

エチオピアが世界に誇るべき産物はコーヒーだけではない。2 千メートルを越える高地で育つ羊の革もその一つだ。0.3 ミリ程度まで薄く剥いてもその強度を失わず、柔らかで肌に吸い付くような滑らかさを持つ。そのため、ゴルフや野球などスポーツ用手袋に使われており、知る人ぞ知る世界最高級の皮革素材である。

独立行政法人国際協力機構(JICA)は、2013 年よりエチオピアで実施している輸出振興策「チャンピオン商品アプローチ」の中で、この羊の革を「チャンピオン商品」として先進国市場に向けた輸出支援を始めている。「チャンピオン商品」とは、その国の文化や歴史に根付いたもので先進国市場でも高い品質が認められ、その国のイメージを高めることができる産品を指す。

数年前まで、エチオピア産の羊の革はなめし前の原皮やなめし途中の状態で輸出され、仕上げや製品加工は海外で行われてきた。そのため、エチオピア産の素材として消費者に認知されることは少なく、コーヒーや優れたアスリートたちのように同国の名を世界に広められる知名度はまだない。

これまでの国際協力では、その国の産品の品質改善を目的とするバリューチェーン上流への支援が多かった。海外の市場でどんなニーズがあるか、どんな戦略で売り出すかといった、輸出目標の設定や市場調査が行われることは少なかったと言える。一方、「チャンピオン商品アプローチ」では、市場調査から始まり、その結果に従ってプロモーションや商品開発の戦略が練られる。その上で、専門家の指導の下、エチオピアの各企業がターゲットとなる市場で関心を引く製品を仕上げていく。

このような技術支援を受けて、2015 年から 2 年間、「エチオピアン・ハイランド・レザー」というブランドとしてファッション業界では有数の日本の展示会に出展した。その成果は上々で、ブースでは多くの商談が行われ、実際にサンプルを受注したエチオピア企業も少なくなかった。ブランドを立ち上げる戦略も当って、同ブランドの商品を販売したいという企業からの要望も寄せられた。エチオピア企業にとって、この活況は自信となった。世界一厳しいといわれる日本市場でこれほど多くのバイヤーが自分たちの製品に興味を示すとは、彼らも考えていなかった。

しかし、最終的に受注まで繋がった商談は数件のみであった。問題は依頼されたサンプルの品質や納期、顧客側の要望にあわせた対応が出来なかったことである。「サンプルはあくまでサンプル、発注を受けるまでにはその問題は解決できる」というエチオピア側の言い分を受け入れる企業はなかった。エチオピア側から納期や生産能力、見積が明確に示されず、問い合わせのメールを送ったが返信がないという苦情も寄せられた。「エチオピアン・ハイランド・レザー」のブランドも立ち上げたばかりで、市場での信望は低い。今後しっかりとした対応をしていかなければ、かえってエチオピアの皮革産業のイメージを壊しかねない。

現在、これまでに分かった課題の解決のため、JICA の支援はエチオピア国内の製造現場における技術移転や、ブランド管理体制の構築にまで活動の枠を広げて行われている。エチオピアから企業の代表らが来日した際には、日本での地域ブランドの成功例である今治タオルを管理する四国タオル工業組合（現：今治タオル工業組合）を訪問し、如何にブランド価値を作り上げ、品質の管理をしているかについて学んだ。

今後は、先進国市場の厳しさを知る職人や生産管理に携わってきた専門家たちが選ばれたエチオピアの各企業を回って協力していく。海外顧客との商談や取引が円滑なものとなるよう、ビジネストレーニングも実施する予定である。

日本の展示会での活況があったからこそ、エチオピア側の問題意識や改善への意欲も高い。多くの課題解決に向けてエチオピア企業はこの日本の支援に大きな期待を寄せている。目指すは 2018 年秋に出展を計画しているヨーロッパでの展示会における受注の獲得だ。

写真下左　展示会では羊の革で作られた靴や鞄等が展示された

写真下右　日本人専門家が各企業を訪問し、指導を行っていく

編集後記

2018 年のエチオピアは、年があけてから、各地でデモ活動（道路封鎖）が頻発、政治犯の釈放、首相の辞任という、政治的に不安定な状況が続いています。2 月初旬は、地方での道路封鎖やデモがはげしくおこり、地方バスが運行できない状況が続いたそうです。いったん地方へでてしまうと、首都へ戻ることができなくなる場合も生じます。現在（3 月 11 日時点）、陸路での移動はすすめられませんが、エチオピア航空国内線は、通常通り運行しています。地方への移動は十分な情報をえたうえでご検討ください。

今年度最後のニュースレターは、これまでの号と比較して非常に多くの方にご寄稿いただきました。ありがとうございました。来年度もよろしくお願いいたします。（MK）

・ 14 頁写真：東京ビッグサイト IFF 会場（撮影：永井教之、2016 年）
・ 16 頁写真上・下： 富山大学（撮影：有井晴香、2017 年）
・ 17 頁写真上：エチオピア西南部（撮影：野口真理子、2014 年）、写真下：エチオピア西南部（撮影：有井晴香、2018 年）
・ 19 頁写真：ジンカ（撮影：金子守恵、2017 年）
・ 20 頁写真上：京都（撮影者：有井晴香、2017 年）
・ 20 頁写真下：アディスアベバ（撮影者：Damtew Woldemariam, 2017 年）
・ 21 頁目写真上：東京ビッグサイト IFF 会場（撮影：永井教之、2016 年）
・ 21 頁目写真下左：東京ビッグサイト IFF 会場（撮影：永井教之、2016 年）
21 頁目写真下右：アディスアベバ（撮影：永井教之、2015 年）

JANES ニュースレター　No.25-3

2018 年 3 月 16 日配信

編集・配信：日本ナイル・エチオピア学会

編集委員：金子守恵、佐藤美穂、佐藤靖明、村橋勲